

籬尾池と聖徳太子

タウンウォッチャー 馬越近成(白鳳台)



籬尾池(撮影:筆者)

その籬尾池は単なる人工池ではありません。明らかに最高の堰堤技術を駆使して築造された親子(二層式)ダム池です。

五つの山峡を堰き止めてダム池とし、片岡(現在の志都美を中心とした地域の山裾に広がる三角アルタ地帯を美田に変えました。即ち竹田川が古川(葛下川の前身)に合流する三角地帯ですが、このダムが完成されてから、竹田川や古川が生まれたと思われず。つまり、このダムは一石三鳥の効果を生んだこととなります。デルタに難渋していたのを救済したこと。デルタを変えて美田にしたこと。太子道を整備して陸路による経済流通を拓いたこと。

籬尾池は、まさに治山治水と云う政治の原点に立ち返った、政治経済改革の証ではないでしょうか。

「籬尾の水甕 モミダネ作る
大和は涸れても まだ作る」
この唄は、香芝の聖徳太子講の人々が、古くから伝承されているものです。大和平野を幾たびか襲った旱魃・飢饉にも籬尾池の水域農地はビクともしなかった。それどころか、乞われるままに「命のように大切なモミダネ」を分けてあげたと云うことであり、更に、この農地が大和米のモミ種子を作る場所になつてきたという歴史の伝承です。

法隆寺の記録によると、推古十五(六〇七)年秋九月、「聖徳太子は天皇に奏して籬尾池を築き給う…」とあり、更に日本書紀には、推古十五年冬、「倭國に高市池・藤原池・肩岡池(片岡池)つまり籬尾池の(こ)か、菅原池を造った。山背国粟隈(宇治市)に大溝(用水路)を掘り、河内国に戸辺池・依網池を造った。また国ごとに屯倉を置いた。」とありますが、この年は、日本にとっても聖徳太子にとっても、文化改革の意味で非常に大切な節目になります。その節目に籬尾池のダムが築造された

と云うことになります。これらは、隋との国際交流をするため万端の準備を整えたといつことと思われず。その意味から籬尾池の完成は歴史的シンボルであると思われず。

推古天皇は聖徳太子を摂政として万機を委ねました。けれども物部守屋を倒し、崇峻天皇を弒逆させたといわれる蘇我馬子は依然として権力の座にあったので、太子は馬子との正面衝突を避けて、協調しながら徐々に天皇の専制的地位を回復しようと努めました。仏教の興隆、冠位十二階の制、十七条の憲法、遣隋使派遣などはその現れであります。

蘇我氏が権力を振るう飛鳥の地を離れ、斑鳩に宮居した太子が秦氏に親しみをもち重用したことは、今日ほぼ通説となるくらい、広く知られております。

日本書紀によれば、秦河勝が大夫として太子の側近に仕えており、推古七年の大地震で上宮が倒壊したとき、直ちに京都の桂宮仮宮殿を建てたこと、太子から仏像を賜つて蜂丘寺(法隆寺)を造つたこと、守屋合戦のとき軍政人として兵を率い、厩戸皇子を守護したことで、太子の長男は山背大兄王と名乗るが、山背盆地は秦氏の勢力の強い土地で、この名からも太子と秦氏の関係が深いことが推定されます。

こつしたことから、太子は大威の司であり、

広く日本各地に分布する約八千戸の秀れた秦氏の技術集団を統括する山背の秦河勝を利用して、大威と土木技術の開発による交易実権を握ろうとしたと考えられます。それは太子が、世のため、人のために経済改革を成し遂げ得るたつた一つの手段であつたのではないのでしょうか。

秦氏は、秦始皇帝の苗裔と称しておりましたが、養蚕・機織・銅鉄鑄造などの技術に通じ、殖産興業にかかわることでも著名であるが、なかでも注目されるのは治水に関する伝えであります。

つまり、高度な籬尾ダムの堰堤技術は、この秦氏の他に考えられません。その秦氏を動かす人は聖徳太子以外に考えられないことです。

この最高の堰堤技術を傾けた籬尾ダムと云う文化遺産が香芝市にあることは、古代の香芝には文化改革を必要とする素地と価値があつたことであり、香芝の古代史及び古代文化を、ジックリと掘り起こしてみることがあるのではないのでしょうか。籬尾池ダムは、まさにその黙示録です。黙示録から発信されるメッセージを、素直に読みとつてみてはいかががでしょうか。

水面をそよぐ風の声は、そのようにささやいているし、池の心は、真実を掘り起こして、何千年も後世の人に伝えるようにと呟いているように思われます。